

〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について —三種類のアンケート調査の結果から—

杉村 泰（名古屋大学）

要旨

本稿は日本語のいわゆる〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について、二者択一テスト、〇×テスト、複数選択テストの三種類のアンケート調査を利用して論じたものである。これにより、「言える—言えない」という許容度の観点と「言う—言わない」という選択率の観点から「言えそうで言わない」など詳細な文法性判断が可能となる。

キーワード： 格助詞、「を」と「から」、二者択一テスト、〇×テスト、複数選択テスト

はじめに

本稿は日本語のいわゆる¹⁾〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について、二者択一テスト、〇×テスト、複数選択テストの三種類のアンケート調査を利用して論じたものである。二者択一テストは選択率の観点から「言う—言わない」という指標を示し、〇×テストは許容度の観点から「言える—言えない」という指標を示し、複数選択テストは選択率と許容度のミックスした指標を示す。これらを組み合わせて使うことにより、「言えそうで言わない」など詳細な文法性判断ができる。

その結果、例(1)も例(2)も「を」の選択率が100%となるが、例(1)では「から」でも不自然ながら言えなくもないが、例(2)では「から」だとかなり言いにくいという違いがあることなどを指摘する。

- (1) 彼は7時に家（ ）出て、大学に行った。
- (2) 彼はアメリカの有名大学（ ）出た。

また、例(3)と例(4)を比べると、動作主視点にも観察者視点にもなる例(3)は「を」の許容度も「から」の許容度も高いのに対し、観察者視点にしかならない例(4)は「を」の許容度は低く「から」の許容度は高いという違いがある。このことから、「を」は動作主視点の解釈にならないと使いにくいことを主張する。

- (3) 彼は怒って部屋 {を/から} 出ていった。(動作主視点、観察者視点)
- (4) 彼は怒って部屋 {*を/から} 出てきた。(観察者視点)

I. 先行研究

日本語の〈起点〉を表す「を」と「から」の選択について、三宅（1995, 1996）は次の規則があることを指摘している。

・意志的にコントロールされない移動の場合は、ヲ格を使うことができない。

(5) 煙が煙突 {*/を/から} 出た。(無意志)

(6) 太郎が部屋 {を/から} 出た。(意志)

その上で、三宅（1995）は例(6)のように意志的にコントロールされる場合について、「特に起点を強調したい場合に、カラ格が選択される (p. 71)」と述べている。三宅（1995）の論は基本的に正しいと思われるが、これだけでは例(7)のように意志的にコントロールされるのに「から」が不自然になる場合の説明ができない。

(7) 彼は7時に家 {を/?から} 出て、大学に行った。

これに対し、楠本（2002）は、「家を出る」、「大学を卒業する」、「席を立つ」等いわゆる動作の起点を標示する表現について、「これらの「を」格文は主体が属していたものからの離脱を表し、さらに「私ごと」の延長として離脱する目的が暗示される（例えば、「家を出て会社へ行く」等）というように学習者に教えるならば、「を」格の存在が理解出来、正しい使い方が出来るようになるであろう (p. 10)」と説明している。このように、どのような場合に「を」を使うかという説明をした方が、どのような場合に「から」を使うかという説明より分かりやすいと思われる。

これらの先行研究を受け、杉村（2005）では日本語を母語とする被験者に「私は毎日7時に家（ ）出る」など14問について「を」と「から」の二者択一テストを実施し、「から」が第一義的に〈起点〉を標示するのに対し、「を」は広い意味で〈働きかけの対象〉を標示するものであると主張している。すなわち、A地点からB地点への移動に重点がある場合は「から」が選択されるのに対し、そこでの活動に終止符を打ち、次へのステージに移ることに重点がある場合は「を」が選択される傾向があることを指摘している。

さらに杉村（2016a）では、杉村（2005）の14問の結果をコーパス調査、 χ^2 乗検定、クラスター分析によって検証し、杉村（2016b）では同じ14問について二者択一テスト（再調査）と〇×テストを実施し、許容度と選択率の関係について論じている²⁾。

これに対し、本稿では「二者択一テスト」（選択率調査）と「〇×テスト」（許容度調査）に加え、「を」と「から」のうち言えるものを全て選ばせる「複数選択テスト」（選択率と許容度のミックスした調査）を使用することにより、話し手の心の中にある許容意識と実際の選択率との関係をより詳細に分析する。また、本稿では設問の数を先行研究の14問から33問に増やし、「を」は動作主視点の解釈にならないと使いにくいことなど、先行研究より詳しい意味分析を行う。

II. アンケート調査の概要

本稿では全部で 33 の場面について、二者択一テスト、○×テスト、複数選択テストの三種類のアンケート調査を実施した。その概要を以下に示しておく。

・調査場面：Ⅲの表 1 に示す 33 場面

・三種類のアンケート調査

① 「二者択一テスト」(選択率)

被験者 70 人に(8)のような設問を提示し、括弧内に「を」と「から」のうちどちらか一つを入れてもらい、「を」と「から」それぞれの割合を出した。

(8) 彼は7時に家()出て、大学に行った。

② 「○×テスト」(許容度)

被験者 70 人に(9)のような「を」のみの設問、別の被験者 70 人に(10)のような「から」のみの設問を提示し、正しいと思えば括弧内に○を、間違っていると思えば×を記入してもらい、それぞれの○の割合を出した。

(9) 彼は7時に家を出て、大学に行った。()

(10) 彼は7時に家から出て、大学に行った。()

③ 「複数選択テスト」(選択率+許容度)

被験者 70 人に(11)のような設問を提示し、「を」と「から」のうち言えるもの全てに○を付けてもらい、「を」のみ、「から」のみ、両方のそれぞれの割合を出した。

(11) 彼は7時に家(を/から)出て、大学に行った。

・被験者：日本語母語話者(愛知淑徳大学・名古屋大学の学生)、各テストとも 70 人ずつ

・実施日：2019 年 5 月 28 日～10 月 10 日

上の①～③のうち、①は「を」と「から」のうち実際にどちらを選択するか(選択率)を見るテスト、②は「を」、「から」それぞれについて言おうと思えば言えるかどうか(許容度)を見るテスト、③は両者の混合したテストである。②も③も言おうと思えば言えるかどうかを判断基準にしている点では同じであるが、②は「を」と「から」のどちらか一つだけを見て可否判断をするのに対し、③は「を」と「から」の両方を見比べながら可否判断をするという違いがある。

III. 調査結果

三種類のテストの結果をまとめると表 1 のようになる。表 1 は二者択一テストで「を」の選択率が高かったものから順に並べてある。これを見ると、全体的に「家を出る→大学に行く」のように次のステージへの移動を表す場合に「を」の選択率や許容度が高く、「ビルから外に出る→？」のように外部への移動にのみ焦点がある場合は「から」の選択率や許容度が高いこ

とが分かる。

表1 「を」と「から」の調査結果 (二者択一の「を」の降順)	二者択一 選択率 (%)		○× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
01. 彼は7時に家()出て、大学に行った。	100.0	0.0	98.6	60.0	58.6	40.0	1.4
02. 彼はアメリカの有名大学()出た。	100.0	0.0	98.6	21.4	97.1	2.9	0.0
13. 彼は一晩泊まった女の家()出た。	90.0	10.0	94.3	74.3	34.3	55.7	10.0
19. 彼は家()出て、一人暮らしを始めた。	88.6	11.4	97.1	42.9	55.7	32.9	11.4
24. 彼は大学()出て、まっすぐ家に帰った。	87.1	12.9	88.6	55.7	45.7	38.6	15.7
09. 彼は校門()出て、まっすぐ家に帰った。	85.7	14.3	95.7	78.6	45.7	45.7	8.6
14. 名古屋行き特急が始発駅()出た。	85.7	14.3	92.9	80.0	50.0	35.7	14.3
28. 彼は学長と喧嘩して、大学()出た。	80.0	20.0	80.0	22.9	64.3	22.9	12.9
31. 彼は買い物が終わって店()出た。	75.7	24.3	90.0	85.7	34.3	57.1	8.6
22. 彼はヤクザの〇〇組()出た。	74.3	25.7	80.0	37.1	61.4	18.6	20.0
05. 彼は家()出て、すぐに車にはねられた。	72.9	27.1	94.3	77.1	32.9	58.6	8.6
04. 彼は学歴詐称が見つかって、大学()出た。	70.0	30.0	48.6	34.3	58.6	25.7	15.7
11. 彼は刑務所()出て、すぐに万引きで捕まった。	65.7	34.3	92.9	81.4	17.1	71.4	11.4
30. 彼は店()出て、すぐに万引きで捕まった。	62.9	37.1	87.1	82.9	14.3	67.1	18.6
32. 彼は玄関()出た。	62.9	37.1	72.9	85.7	28.6	28.6	42.9
16. 渋滞でタクシー()下りて、歩いて帰った。 ³⁾	58.6	41.4	72.9	81.4	18.6	52.9	28.6
07. 渋滞でタクシー()下りて、たばこを吸った。	57.1	42.9	72.9	87.1	14.3	67.1	18.6
17. 彼は家()出て、外の空気を吸った。	57.1	42.9	81.4	88.6	21.4	55.7	22.9
03. 彼は怒って部屋()出ていった。	41.4	58.6	87.1	98.6	7.1	81.4	11.4
20. 彼はトイレ()出た。	40.0	60.0	68.6	92.9	7.1	45.7	47.1
29. 名古屋行き特急が3番線()出た。	38.6	61.4	77.1	92.9	8.6	37.1	54.3
18. 彼は地震でつぶれたビル()出た。	31.4	68.6	48.6	90.0	7.1	21.4	71.4
06. 彼はお風呂()出た。	28.6	71.4	72.9	100.0	4.3	54.3	41.4
27. 彼は布団()出た。	24.3	75.7	38.6	100.0	5.7	20.0	74.3
08. 台風の際は家()出るな。	17.1	82.9	62.9	100.0	1.4	55.7	42.9
15. 彼は逃げる時、裏口()出た。	10.0	90.0	25.7	100.0	0.0	11.4	88.6
21. 彼は怒って部屋()出てきた。	10.0	90.0	38.6	94.3	7.1	34.3	58.6
25. 地震の際は家()出る。	10.0	90.0	41.4	94.3	1.4	24.3	74.3
33. 彼が知らない女の家()出てきた。	5.7	94.3	27.1	100.0	1.4	12.9	85.7
10. 怪しい男がビル()出てきた。	4.3	95.7	22.9	100.0	0.0	15.7	84.3
12. 警官が彼に、「このビル()出ていけ」と言った。	4.3	95.7	28.6	98.6	2.9	22.9	74.3
23. 怪しい男が校門()出てきた。	4.3	95.7	25.7	100.0	0.0	10.0	90.0
26. 警官が彼に、「そのビル()出てこい」と言った。	2.9	97.1	22.9	98.6	1.4	10.0	88.6

IV. 調査結果の分析

1. 選択率と許容度

表1の上位2例(表2)は、いずれも「を」の選択率が100%、許容度が98.6%で差がないが、「から」の許容度は約3倍違う。ここで複数選択の結果を見ると、問01も問02も「から」の割合はほぼ0%となっている。しかし、問01では「両方」が40.0%であるため、話し手の心の中では「から」でも言えなくもないと捉えられているのに対し、問02では「を」が97.1%と高いため、話し手の心の中でも「から」は言いにくいと捉えられていることが分かる。また、問02は〇×テストでは「から」の許容度が21.4%となっているが、「を」と比べながら判断する複数選択テストでは2.9%（「両方」と「から」の合計）しかないため、問01に比べて「を」のイメージが強いことが分かる。

表2 表1の上位2例	二者択一 選択率 (%)		〇× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
01. 彼は7時に家()出て、大学に行った。	100.0	0.0	98.6	60.0	58.6	40.0	1.4
02. 彼はアメリカの有名大学()出た。	100.0	0.0	98.6	21.4	97.1	2.9	0.0

2. 複数選択の割合の高いものの特徴

次に複数選択の「を」「両方」「から」の割合が高いものの順にその特徴を見る。まず表3は複数選択の「を」の割合が高いものである。このうち問02、28、22、04はある組織からの離脱を表す点で共通している。中でも卒業の意味を表す問02は「を」のイメージがかなり強く、選択率も「を」が100%となっている。しかし、それ以外の3問は複数選択で「両方」の割合が約20~40%あり、〇×テストや二者択一テストでも約20~40%あるため、話し手の心の中では「から」でも言えなくもないと捉えられていることが分かる。なお、問04の〇×テストの結果は「を」も「から」もさほど許容度が高くなかった⁴⁾。この理由については今後考えていきたい。

表3 複数選択の「を」の降順 (上位5問)	二者択一 選択率 (%)		〇× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
02. 彼はアメリカの有名大学()出た。	100.0	0.0	98.6	21.4	97.1	2.9	0.0
28. 彼は学長と喧嘩して、大学()出た。	80.0	20.0	80.0	22.9	64.3	22.9	12.9
22. 彼はヤクザの〇〇組()出た。	74.3	25.7	80.0	37.1	61.4	18.6	20.0
01. 彼は7時に家()出て、大学に行った。	100.0	0.0	98.6	60.0	58.6	40.0	1.4
04. 彼は学歴詐称が見つかって、大学()出た。	70.0	30.0	48.6	34.3	58.6	25.7	15.7

次の表4は複数選択の「両方」の割合が高いものである。これらは「部屋で怒る→別の場所で頭を冷やす」、「刑務所生活→一般社会での生活」、「タクシー乗車→外での喫煙」、「店・家での活動→外での歩行」のような次のステージへの移動とも捉えれば「を」のイメージとなるし、単なる主体の外部移動とも捉えれば「から」のイメージとなる。そのため、これらは〇×テストでも「を」と「から」の両方の許容度が高くなると考えられる。しかし、問03、07に比べ、問11、30、05は二者択一テストで「を」の選択率の方が「から」の選択率よりかなり高くなっている。特に問05は「を」の選択率が72.9%と高く、複数選択テストでも「を」が32.9%と他に比べて高くなっている。これはこの5つの文の中で問05が一番「次のステージへの移動」のイメージが強いためであると思われる。

表4 複数選択の「両方」の降順 (上位5問)	二者択一 選択率 (%)		〇× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
	03. 彼は怒って部屋()出ていった。	41.4	58.6	87.1	98.6	7.1	81.4
11. 彼は刑務所()出て、すぐに万引きで捕まった。	65.7	34.3	92.9	81.4	17.1	71.4	11.4
07. 渋滞でタクシー()下りて、たばこを吸った。	57.1	42.9	72.9	87.1	14.3	67.1	18.6
30. 彼は店()出て、すぐに万引きで捕まった。	62.9	37.1	87.1	82.9	14.3	67.1	18.6
05. 彼は家()出て、すぐに車にはねられた。	72.9	27.1	94.3	77.1	32.9	58.6	8.6

次の表5は複数選択の「から」の割合が高いものである。これらの文はいずれも外部への移動にのみ焦点があり、次のステージのことはあまり意識されていない。この場合、〇×テストでも「から」の許容度が高く、「を」は低くなっており、二者択一テストでも「から」の選択率が90%以上と高くなっている。

表5 複数選択の「から」の降順 (上位5問)	二者択一 選択率 (%)		〇× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
	23. 怪しい男が校門()出てきた。	4.3	95.7	25.7	100.0	0.0	10.0
15. 彼は逃げる時、裏口()出た。	10.0	90.0	25.7	100.0	0.0	11.4	88.6
26. 警官が彼に、「そのビル()出てこい」と言った。	2.9	97.1	22.9	98.6	1.4	10.0	88.6
33. 彼が知らない女の家()出てきた。	5.7	94.3	27.1	100.0	1.4	12.9	85.7
10. 怪しい男がビル()出てきた。	4.3	95.7	22.9	100.0	0.0	15.7	84.3

3. 動作主視点と観察者視点

次に動作主視点と観察者視点の違いについて見る。たとえば、例(12a)は動作主である「彼」の視点から述べる場合にも、観察者である話し手の視点から述べる場合にも使われる。本稿では前者の場合を「動作主視点」、後者の場合を「観察者視点」と呼ぶことにす

る。一方、例(12b)のテイク文は視点が起点にあることを明示しているという点で違いはあるものの、例(12a)と同様に動作主視点でも観察者視点でも使われる。これに対し、例(12c)のテクル文は着点に視点があるため、着点側から「彼」の帰りを観察するという観察者視点で使われやすい⁵⁾。

(12)a. 彼は会社から家に帰った。(動作主視点、観察者視点)

b. 彼は会社から家に帰っていった。(動作主視点、観察者視点)

b. 彼は会社から家に帰ってきた。(観察者視点)

ここで表6の間13と問33はいずれも「彼が女の家から出たこと」を表しているが、問13は動作主視点とも観察者視点とも解釈できるのに対し、問33は観察者視点としてのみ解釈されやすいという違いがある。そのため、問13は動作主の視点から「女の家での生活→外での生活」という次のステージが意識されやすいが、問33は外部への移動にのみ焦点があり、その後ことはあまり意識されないという違いが出てくる。このことは〇×テストと複数選択テストの結果にも示されており、問13は「を」だけでなく「から」もある程度許容される（「から」+「両方」で65.7%）が、問33は「から」の許容度は高いものの「を」の許容度は低くなっている（「を」+「両方」で14.3%）。

表6 動作主視点と観察者視点	二者択一 選択率 (%)		〇× 許容度 (%)		複数選択 選択率+許容度 (%)		
	を	から	を	から	を	両方	から
13. 彼は一晩泊まった女の家()出た。	90.0	10.0	94.3	74.3	34.3	55.7	10.0
33. 彼が知らない女の家()出てきた。	5.7	94.3	27.1	100.0	1.4	12.9	85.7
03. 彼は怒って部屋()出ていった。	41.4	58.6	87.1	98.6	7.1	81.4	11.4
21. 彼は怒って部屋()出てきた。	10.0	90.0	38.6	94.3	7.1	34.3	58.6
18. 彼は地震でつぶれたビル()出た。	31.4	68.6	48.6	90.0	7.1	21.4	71.4
10. 怪しい男がビル()出てきた。	4.3	95.7	22.9	100.0	0.0	15.7	84.3
12. 警官が彼に、「このビル()出ていけ」と言った。	4.3	95.7	28.6	98.6	2.9	22.9	74.3
26. 警官が彼に、「そのビル()出てこい」と言った。	2.9	97.1	22.9	98.6	1.4	10.0	88.6

また、問03と問21を比較しても、動作主視点にも観察者視点にもなる問03の方が「を」を取りやすく、観察者視点の間21の方が「から」を取りやすいという結果になっている。なお、同じ動作主視点にも観察者視点にもなる場合でも、問03に比べて先の間13の方が「を」の選択率が高くなっている。これは問13の方が「女の家での生活→外での生活」という次のステージへの移動のイメージが強いためであると考えられる。

同様に問18と問10を比べると、動作主視点にも観察者視点にもなる問18の方が「を」を取りやすく、観察者視点の間10の方が「から」を取りやすいという結果になっている。問18もビルの外に出た後のことはあまり想定されていないため「を」の選択率は31.4%

と低い、単にビルからの離脱を観察したことを述べる問 10 に比べると、「ビルに閉じ込められている→外に開放される」という次のステージを読み込みやすいので、相対的に「を」の選択率や許容度が高くなっていると考えられる。

ところで、問 12 と問 26 は形式的に「出ていく」「出てくる」という対立になっているが、どちらも「から」の選択率や許容度が高くなっている。これはどちらもビルからの離脱に焦点があり、その後のことは話の焦点になっていないためであると考えられる。しかし、中国語を母語とする日本語学習者 (N1 合格レベル) 70 人に本稿と同じ二者択一テストを実施したところ、問 12 は「を」の選択率が 57.1%、「から」が 42.9%であったのに対し、問 26 は「を」の選択率が 11.4%で、「から」が 88.6%と大きな差があった。この点については今後考察するつもりである。

おわりに

以上、本稿では二者択一テスト、○×テスト、複数選択テストの三種類のアンケート調査を利用して、日本語のいわゆる〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について論じた。特に先行研究では使われていない複数選択テストを利用することにより、話し手の心の中にある「言えそうと言わない」のような許容意識と実際の選択率との関係をより詳細に分析した。また、設問の数を先行研究の 14 問から 33 問に増やし、「を」は動作主視点の解釈にならないと使いにくいことなどを明らかにした。紙幅の関係で一部の事象についてしか論じることができなかったが、今後さらに「を」と「から」の選択の要因について分析を進めていくつもりである。また、学習者のデータも分析し、日本語話者との違いを明らかにしていく予定である。

注

- 1) 本稿では「を」は第一義的には〈働きかけの対象〉を標示すると考えるため、「いわゆる」という表現を用いている。
- 2) 杉村 (2005) と杉村 (2016b) の被験者は異なっているが、「を」と「から」の選択率はよく似た数字となっている。
- 3) 設問 16 番と 7 番のみ「出る」ではなく「下りる」の例となっている。これは「タクシーを出る」より「下りる」のほうが自然なためである。
- 4) 杉村 (2016b) でも「彼は学歴詐称が見つかって、大学 () 出ることになった」の○×テストによる許容度は、「を」が 51.7%、「から」が 40.0%となっている。
- 5) ただし、動作主が一人称の「私」の場合は、テクル文でも動作主視点になると思われる。今回は動作主を三人称に設定して調査したが、今後は一人称の場合と比較する必要があると思われる。

参考文献

- 楠本徹也 (2002) 「「を」格における他動性のスキーマ」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』28号, 東京外国語大学留学生日本語教育センター、1-12頁。
- 杉村泰 (2005) 「起点を示す格助詞「を」と「から」の使い分け」『ことばの科学』第18号、名古屋大学言語文化研究会、109-118頁。
- 杉村泰 (2016a) 「中国語話者における〈起点〉を表す格助詞「を」と「から」の選択について」『日語教育と日本学研究—大学日語教育研究国際研究会論文集 (2015)』、華東理工大学出版社、1-4頁。
- 杉村泰 (2016b) 「日・中語話者における起点を表す格助詞「を」と「から」の選択傾向の違いについて—二者択一テストと〇×テストの比較」『日語偏誤と日語教学研究』第1輯、日語偏誤と日語教学研究会、浙江工商大学出版社、3-20頁。
- 三宅知宏 (1995) 「ヲとカラー起点の格標示」宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』くろしお出版、67-73頁。
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110号、日本言語学会、143-165頁。

Choice of case particles *o* and *kara* indicates starting point or origin: According to Results of Three Types of Questionnaire Surveys

SUGIMURA, Yasushi

Abstract

This article discusses the choice of case particles *o* and *kara* that indicate starting point or origin, using three types of questionnaire surveys which are alternative test, true-false test, and multiple choice test. Analyzing this results from the perspective of acceptability (“can be used” – “cannot be used”) and selection rate (“used” or “not used”) enables the researcher to make a fine grammatical prediction of real-life usage (“not likely to be used” etc.).

Keywords : case particles, *o* and *kara*, alternative test, multiple choice test, multiple choice test